中古の文学作品からみた山里の興趣について

文学作品からみた我国の山居観—その2

正 会 員 小 野 恭 平*

序

本研究は平安時代以降、理想的な風雅・修道の住み処として、多くの歌に詠まれ、絵に描かれ、また実際にも貴族の山荘や遁世者の草庵が営まれた山里について注目し、そこでの山居の観念（思想・美・イメージ等）を明らかにしようとしたもので、そのことを通して一極めて特殊な側面からではあるが日本人の住居観の一端を明らかにしようとしたものである。

さて前稿では¹⁾、平安時代以降王朝人によって最も風雅な場所とされてきた山里が、寂寥感を基調にした独自の美的世界となっていたことを指摘したが、勿論山里にはこうした美以外にも様々な美や魅力ある興趣が存在していたわけで、本稿ではそれらを明らかにしておきたい。

なお前稿でも述べたように、中世末に登場する草庵風茶室は、「市中の山居」とも言われるように、山居の系譜に連なるもので、従って各時代の山居の観念を明らかにすることは、草庵風茶室の思想・美意識等の系譜を明らかにすることにもなるであろう。そこで以下ではそうした点にも言及しておくことにする。

なお本稿で資料として用いた文学作品は、主として日本古典文学大系本（岩波書店）所収のものであるが、勅撰歌集については国歌大観（角川書店）を、私家集については私家集大成（明治書院）の中古Ⅰ及び中古Ⅱを、漢詩文については日本古典文学大系にあるものはそれを用い、ないものについては群書類従本を用いた。

1. 山里の自然、田園、眺望

① 中古の文学作品の中で、山里の興趣として最も多く注目されているのが、山里の自然である。そしてそれは先ず何よりも「めづらしきもの」²⁾とされていた。室内生活を専らとする王朝人にとって、彼等が普段目にする自然といえば、せいぜい邸内に造られた庭園か絵画に描かれた自然ぐらいで、それらの馴致され、装飾化された擬似的自然に比べれば、確かに山里の自然は京では体験することのできない「斬新で讃嘆すべきもの」であったろう。

・二十日の月、はるかに澄みて、海の面、おも白く見えわたるに、

霜の、いとこちたく置きて、松原も色まがひて、よろづの事、そゝろ寒く、おもしろさも立添ひたり。（中略）御門より外物見、をさをさしたまはず。まして、かく、宮この外のありきは、まだならひ給はねば、めづらしく、をかしくおぼさる。（源氏物語、若紫）

・はるばると霞みわたれる空に、「散る桜あれば、今は開けそむる」など、色々見わたさるゝに、川ぞひやなぎの、おきふし靡く水影など、おろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ人は「いと、めづらしく、見捨てがたし」とおぼさる。（同、椎本）

② なかでも山里の自然の移ろいは、季節の変化にとりわけ敏感な王朝人にとっては、極めて興味深い現象だったのであろう、山里の遅い春、早い秋といった京とは異質な季節の移ろいが目をひいていた。

・七月ばかりになりけり。都には、まだ入ったゝぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槇の山辺もわづかに色づきて、猶たづね来たるに、をかしう、めづらしうおぼゆるを（源氏物語、椎本）

・三月のつごもりなれば、京の花ざかりは、みな過ぎにけり。山の桜は、まださかりにて、入りもておはするまゝに、霞のたゝずまひも、をかしう見ゆれば、かゝるありきも、ならひ給はず、所狭き御身にて、めづらしう思されけり（同、若紫）

③ また山里の自然は、そのめづらしさやおもしろさ³⁾によって、都市生活の煩わしさや悩ましさを一掃してくれるものとされていた。

・右大将殿、桂におもしろき所に、大いなる殿つくりて、花盛、紅葉盛などにも物し給ひて、心やり給ふ。花の盛なれば、日頃、仲忠の母北の方を率ておはして、心やり遊び給ふ。「あやしく世の中忘れられ、心ゆく所にこそありけれ。この春夏こゝに過ぐさん」とて、ものし給ふに、花の色をつくして咲きまじり、水は絲の乱れたるやうに流れ入りて、いと面白し。（宇津保物語、梅の花笠）

・明け行く空は、いといたう霞みて、山の鳥ども、そこはかとなくさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花ども、色々に散りまじり、「錦をしける」と見ゆるに、鹿のたゝずみありくも、めづらしく見給ふに、なやましさも紛れはてぬ。（源氏物語、若紫）

確かに山里の自然は、王朝人が日頃目にする自然とは違って、室内の微温的空氣に慣れた感覚にとっては、気分を一新してくれるような新鮮な体験を提供してくれる

* 北海学園大学 助教授

（1988年11月7日原稿受理、1989年7月19日採用決定）

ものであったろう。枕草子 223 段に、宮づかへの女房達が徒然な五月、山里ありきに出かけた時の印象を描いたところがあるが、山里の清澄な空気に触れた喜びが次のように描かれている。

・五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水も、いとあおく見えわたりたるに、上はつれなくて草生ひ茂りたるを、ながながとたださまに行けば、下はえならざりける水のふかくはあらねど、人などのあゆむに、はしりあがりたる、いとをかし。左右にある垣にあるものの枝などの、車の屋形などにさし入るを、いそぎとらへて折らんとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ、いとくちをしけれ。蓬の車に押しひしがれたりけるが、輪の廻りたるに、近ううちかかりたるもをかし。

王朝人にとって山里の自然は、狭小な都市の日常生活の中で疲弊し硬直化した感覚を一新・解放してくれるものだったのである。

④ 一方、王朝人にとっては、自然の中で展開される山里の田園風景もまた興味あるものとされていた。王朝人が田園の風景に対して強い興味を抱いていたことは、屏風絵などの主題にそうした風景が好んで描かれていたことからわかるが⁴⁾、なかでも、彼等が最も興味を示したのが田植や稲刈りなどの風俗であった。例えば枕草子 226 段には、賀茂へ参る途中、農家の女達が歌を唄い、田植をする様が好奇の目で見られているし⁵⁾、227 段では稲刈の様子が「をかし」く、「せまはしげに見ゆる」と述べられている⁶⁾。山里の自然が王朝人にとってめづらしきものであったように、こうした田園の風俗もまた、彼等にとっては山里ならではの鄙びた味わいを伝えてくれる「めづらしきもの」だったのであろう。

なお、それ故であろうが、山里を訪れた都人にそうした田園風俗を見せることは、山里らしい格好の「もてなし」ともされていた。例えば枕草子 99 段には、清少納言達が賀茂の奥にある高階明順朝臣（定子の伯父）の山荘を尋ねた時、近所の若い女達をよび、脱穀の様を演じさせ、その「めづらし」さに興じあったことが記されているし、源氏物語・手習の巻にも、塞ぎがちな浮舟に女達が「稲刈るとて、所につけたる物まねび」をして見せたことが描かれている。

⑤ また山里は、眺望にすぐれていることも重要な興味の一つであった。源氏物語（若紫）に、わらは病の療養に訪れた源氏が、北山から京の方を見はらしながら「かゝる所に住む人、心に思ひ残すことあらじかし」と、その眺望を賛嘆しているところがあるが、菅家後草「山屋晚眺」にもそうした感動が「形骸外事惣忘言」と述べられている。広大な自然を前にすると、心はおのづと世俗の名利や憂煩から解放され、無限の空間に解き放たれてゆくようだというのである。眺望への好みは人間が本来的にもっているものであろうが⁷⁾、とりわけ、室内生活を専とする王朝人にとっては、広々とした眺望は大きな感

動と解放感を与えてくれるものだったのであろう。ちなみに、前稿でも述べたように、中古の山荘の多くは眺望のきく所に建てられていたが、それもこうした解放的な気分を求めていることであつたろう。

なお、眺望の有無は、山荘の庭園を評価する際の基準ともなっており、今鏡（藤波）には、白河院と勝地定めをした俊綱が、白河院の鳥羽殿は「地形眺望など、いとなき所なり」という理由で、自らの伏見の山荘の方が勝れていると自讃したという逸話が記されている。実際、俊綱の伏見の山荘は「野山のけしき色づきわたるに、伏見山、田面に続く宇治川の川浪、はるばると見渡されたるほど、いと艶あるを、若き人々など、身にしむばかり思へり」（増鏡、老のなみ）というように、非常に眺望のすぐれた所だったようである。

また眺望される風景のなかでは、倭絵屏風などに「遙々と野を行く旅人」が多く描かれていたように⁸⁾、そうした風景が好まれていたようである。実際、先の伏見の山荘では「伏見には山道をつくりて、しかるべき折節には旅人をしてゝ通されければ、さるおもしろきことなかりけり」（今鏡）とあるように、野を行く旅人を描いた屏風絵風の風景が再現され楽しまれていた。まだ見ぬ歌枕への旅は王朝人の憧憬のまとであつたが、これはそうした旅を山里において擬似的に再現したものであろう。

2. 山荘の庭

中古の文学作品において、山荘の情景が描写される際には、必ずといってよいほど先ずその庭の情景から描写されている。そしてそこでは、次に示す庭園描写のように、「木立ちいとよしある」とか「はかなき小柴垣も故ある様にしなして」、「水の流れもをかしう」のように、庭の木立ち、垣、水の流れなどがとりわけ興味ある様にされていることが注目されている。そこで以下では、それらの何が特に興味ありとされていたのか見てみることにする。先ず源氏物語に登場する山荘の庭園描写の主要なものを次に示しておく。

- a) このつゞら折の下に、おなじ小柴なれど、うるはしうしわたして、清げなる屋・廊などつゞけて、木立いとよしあるは、何人の住むにか（若紫、北山の山荘）
- b) つくれるさま、木ぶかく、いたきところまさりて、見所ある住ひなり。（中略）三昧堂ちかく、鐘の聲、松風にひびきあひて、物悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。（明石、明石の君の住む岡部の山荘）
- c) 家のさまも、おもしろうて、（中略）造りそへたる廊など、ゆゑあるさまに、水の流れも、をかしうしなしたり。（松風、大井の山荘）
- d) はかなき小柴垣も、故ある様にしなして、かりそめなれど、あてはかに住まひなし給へり。（夕霧、一条御息所の山荘）
- e) やまのかげは小暗き心ちするに、ひぐらし鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子の、うち靡けるもをかしう見ゆ。前の前

栽の花どもは、心にまかせて乱れあひたるに、水の音、いと涼しげにて、山おろし心すごく、松のひびき、木深く聞えわたされなどして、不断の経読む時かはりて、鐘うち鳴らすに、立つ聲も居かはるも一つにあひて、いと尊く聞ゆ。(夕霧、同上)

- f) 昔の山里よりは、水の音もなごやかなり。造りざま、故ある所の木立ち、おもしろく、前栽もをかしく、故をつくしたり。(手習、小野の山荘)

① 先ず庭の「木立ち」については何が注目されているかという点、上に挙げた例 (b, e) や「木高き森の様な木ども、木深くおもしろく、山里めきて」(乙女)とあるように、木深きところが山里らしい風情として注目されていたことがわかる。即ち山里の庭が木深いのは、人里離れた場所柄によるものであるが、その人里離れた奥深い幽寂な趣が「おもしろく」「見所ある」とされていた。また深い木立ちの風情のなかでは、木立ちを渡る風の音、殊にその松風の音が鐘の聲・虫の聲の一つになるところが注目されていた (b, e)⁹⁾。蕭々として吹く松風の寂しげな音が、山里の寂しさを深め、その寂しさの中に鐘の聲・虫の聲が配されることによってつくりだされる艶なる風情¹⁰⁾が興味ありとされていたのである。

② 次に山荘の垣は、京の邸の築地塀のように内部と外部を厳しく仕切ったり、家の格式や権威を示すものではなく、ささやかに野を仕切る程度の形ばかりの垣で、田舎家風の野趣ある柴垣、卯の花垣、竹垣などにされていた¹¹⁾。山荘は、後述するように、山里の鄙びた風情や田園生活を楽しむためのものであるから、当然そこでは垣も、所につけた田舎家風のものが求められたのであろう¹²⁾。

もっとも、山里の垣は田舎家風にされてはいたが、やはり貴族の山荘らしく「同じ小柴なれど、うるはしう、しわたして」(若紫、北山の山荘)とか「はかなき小紫垣も故ある様にしなして」(夕霧、一条御息所の山荘)のように、小ざっぱりとした、清々しい、品位を崩さないものにされていて¹³⁾、山賊・田夫のそれとは自ずと異なった風にされていた点は注意すべきであろう。

③ 次に、山荘の庭には必ずと言ってよいほど山から流れ落ちる滝・溪流・遣水など、水の流れが配されており、とりわけそこでは水の音が注目されていた。古来水の流れは俗塵を洗うものとされ¹⁴⁾、また水の音は山里の世離れた雰囲気を深め、物の音を一層澄んだものにするように思われていたから¹⁵⁾、その清浄・清澄な印象が山里にふさわしい趣として注目されていたのであろう。なお、源氏物語には、水の音と読経の聲が一つになって聞こえてくるという描写が多くみられるが¹⁶⁾、それも、水の音の清らかさによって、読経の聲が一層清らかで尊いものとなり、俗世を去った山里に相応しい情趣をつくりだしていたからであろう。

3. 山荘の建築と調度

中古の文学作品においては、山里の自然がそうであったように、山荘の建築や調度もまた珍しく、をかしく、おもしろきものとされていた。即ち、「所につけたる御住ひ、やう変わりて『かゝる折ならずば、をかしうもありなまし』」(源氏物語・須磨)とか「ところにつけて、御しつらひなど、をかしうしなして」(同、椎本)のように、京の住まいとは異なった造り様が注目され、それが興味ありとされていた。以下ではそれをもう少し具体的にみてみることにする。

① 先ず注目されるのは、山荘の建築や調度が「何のいたはりもなく建てたる寝殿の事そぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり」(源氏物語、松風、大井の山荘)とか「山里びたる綱代屏風などの、ことさらに事そぎて、見どころある御しつらひ」(同、椎本、宇治の山荘)のように、ことさら簡素なものにされており、それがかえって趣深いとか、見どころがあるとされている点である。後述するように、清らかな自然の中での質朴・簡素な生活を楽しむための山荘であってみれば、確かに、飾らない簡素な建築・調度の方がふさわしいし、しかも山里にあつては山荘は、「四方の山の鏡と見ゆる汀の水、月影に、いと、おもしろし。京の家の、『かぎりなく』と磨くも、え、かうはあぬぞや」(源氏物語、総角、宇治の山荘)とか「松が崎の小山の色なども、さる巖ならねど、秋の気色づきて、『宮こに二なく』と、つくしたる家居には、猶、あはれも興も勝りてぞ見ゆるや」(同、夕霧、一条御息所の小野の山荘)とあるように、その自然によってこの上なく美しいものになっていたわけであるから、そうした自然の美しさを害わせないためにも、やはり簡素な建物の方がふさわしかったものと思われる。

② 一方、文学作品の中では山荘の建築は、簡素であるだけでなく、殊更粗末な(はかなき)造りであることも強調されており、それもまた興味ある点とされていた。例えば、枕草子 99 段にみえる高階明順の賀茂の山荘は、「屋のさまもはかなだち、廊めきて」はいたが「をかし」とされていたし、源氏物語の源氏の須磨の山荘も、「はかなき、旅のおまし所」ではあったが「かゝる折ならずば、をかしうもありなまし」(須磨)というような住居であった¹⁷⁾。「はかなげな」造りとは、小さく粗末な造りを意味しているが、そうした造りが興味ありとされる理由は幾つか考えられる。一つは、王朝人の田園趣味と同じように、そうした造りが京の広壮華麗な邸宅に住む王朝人にとっては珍しきものであったということもあろうし、また特に漢詩においては、そうした造りを「茅屋三間」とか「松桂三間」¹⁸⁾と表現し、「三間茅屋送残生」¹⁹⁾とか「茅屋三間得自由」²⁰⁾とあるように、「粗末な小屋にこそ自由と残生を送るにふさわしい安らぎがあ

る」というような思想がみられるから、そうした思想も背景にあったのではないと思われる。即ち慶滋保胤の「池亭記」でも述べられているように²¹⁾、巨萬の富を費して心を勞し、豊屋峻宇を建てたとしても、永久に住むことが出来るわけでもないし、災害や世の転変の様を考えれば、むしろ「長生自在福謙家 疎牖低簷向月斜」(菅家文草、卜居)とか「茅屋三間竹數竿 便宣依水比生安」(同、閑居)とあるように、一身を容れるに足るだけの粗末な小屋にこそ何らの煩いも執着もない晏如たる生があると考えられる。はかなげな住まいであるにもかかわらず、それが逆に評価されるのは、こうした思想があったからであろう。

③ 一方、山里の粗末な小屋が評価される他の理由としては、それが田舎家風の造りにされていたから、ということもあったであろう。即ち、先に「をかし」き住まいとされた高階明順の山荘も「田舎だち」たる住まいであったし(枕草子 99 段)、源氏の須磨の山荘も(葺(かや)屋ども、葦ふける廊めく屋など)からなる「所につけたる」山里らしい田舎家風の造りにされていた。(須磨)都市や宮廷生活に飽きた王朝人が山里へ出かけて行き、その鄙びた味わいを楽しんだように(4-②)、田舎家風の建物も、その素朴で鄙びた味わいが山里らしい興趣として愛されたのであろう。ただし、山荘の建物は、田舎家風にされてはいたが、田舎家そのものではなく、あくまで貴族の山荘らしい品位を崩さないものにされていたであろうことは、山荘の垣がやはり田舎家風にされていたにもかかわらず、小ざっぱりとした風情ある様にしなされていたことから想像されるであろう。

④ 一方、田舎家風の粗末な造りが評価される他の理由としては、例えば源氏物語・明石の巻にみえる明石入道の邸が「宮この、やむごとなき所々に異ならず、艶に、まばゆきさま」(明石)に造られた邸であったにもかかわらず、一方では同じ敷地内に「時々につけて、興さかすべき渚の苦や」(明石)が造られていたように、田舎家風の粗末な造りが風流を愉しむための意匠ともされていたから、ということも考えられる。即ち、次に示す歌からもわかるように、王朝人は好んで粗末で鄙びた草屋の上に降る花や雪、茅間から洩れる月の光のように、鄙びた侘しい環境の中に配置された風月を山里らしい風流な情景として見ており、粗末な田舎家風の造りはそうした情景を演出するための背景としても評価されていたのではないと思う。

・山里にまかりたるに、竹のかたはらに花をかしう咲きたるを、風いたく吹き、竹の葉も花も、ほどなき賤の屋にひまなく散りかゝりたるを見るほどに(後略)―見せばやな笹の庵に春風のたくみにおろす花のうはぶき(二条太皇太后宮大弐集)

・山里はまばらの軒の茅間より洩りくる秋の夕月夜かな(出観集、覚性法親王)

・山里は茅間の苔の深ければうらみどりなる軒の白雪(同上、同上)

ところで、このような粗末で鄙びた環境に美しいものを配置して見るという見方は、前稿でも指摘したように、中古における多くの物語や屏風絵に見え、王朝人がとりわけ好んだ美の見方であったように思われる。その典型的な例が源氏物語・須磨の巻に見られる。即ち、須磨では源氏は衣裳まで田舎風にし、「山がつめきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の、狩衣・指貫、うちやつれて、殊更に、ゐ中びもてなし給える。」にもかかわらず、そうした姿がかえって「清らなり」とされている。「清ら」とは、本来的に完璧な美しさを持つものの美が、ある条件が満たされることによって一層の輝きや、つややかさを見せて外部に匂い出るさまをいう(小学館古語辞典の語誌による)が、そうした美がここでは源氏が全ての面を山賤めかす(やつす)ことによって実現されている。つまり粗末で鄙びた衣裳や環境によって、かえってその美が一層の輝きを増す、と見ているのである。このような見方は、以後も、山里の美の特徴的な見方として継承され、それは例えば中世後期の市中の山居(草庵風茶室)にも見られるところであるが、これについては後述する。

⑤ 山荘の興趣としては、「山荘の建物と自然の近さ」もまた注目されていた。1章で述べたように、めずらしい山里の自然と接するための山荘生活であってみれば、山荘の建物も出来るだけ自然と真近に接することができるような造りにされていたであろうことは容易に想像できる。実際、先に紹介した高階明順の山荘も「廊めきて、端近に、あさはかなれど、をかしきに」とあるように、奥行の浅い開放的な造りにされていたし、源氏物語の一条御息所の小野の山荘や宇治八宮の山荘も「あさはかなる廂の軒」(夕霧)や「程なき軒の近さ」(総角)とあるように、奥行きの浅い軒にされ、軒端が近く、自然と真近に接することができるような造りにされていた。なかでも、軒の出を浅くするのは、作庭記に「軒短かきを楼と名付け(中略)楼は月を見む為」(雑部)とあるように、観月のため(月の光を奥深くまで入れるため)の手法で、特に中古の文学作品においては、月の光に照らされた端近な場所での男女の語らいが最も美しい場面として描かれているから²²⁾、そうした場面を演出するための意匠でもあったろう。ちなみに、中古の文学作品においては、狭衣物語に男主人公と女主人公の逢瀬の首尾を「程もなき軒の月影も、いかゞありつらん」と言っているところがあるように、月の光に照らされた端近な場所は「逢瀬の場所」と同義語のようになっており、程もなき軒はそうした場所には不可欠な舞台装置だったことがわかる。

なお、軒の出が浅いのは、そのことによって桜や紅葉が屋内まで散り乱れてくるような場面をつくりだすこともできるわけで²³⁾、要するに自然を屋内に引きこみ、屋

内に居ながら自然の只中に在るような趣をつくりだすための意匠だったのである。

4. 山里のあそび

① 王朝人にとって山里は最も身近な郊外の「あそび」のための場所であった。山里の美しい自然の中で逍遙し、楽を奏し、詩歌をつくり、酒盃を傾けるといったあそびは、王朝文化のみやびを代表する最も華やかなあそびであった。

・「今日は、猶、桂殿に」とて、そなたざまにおはしましぬ。にはかなる御あるじし、さわぎて、鶺鴒ども召したるに、海士のさへづり、思し出でらる。野に泊りぬる君だち、小鳥、しるしばかり引きつけさせたる荻の枝など、つとにして、参れり、大御酒、あまたゝび、ずむ流れて、川のわたりあやふげなれど、酔ひにまぎれて、おはしまし暮らしつ。おのおの絶句など作りわたして、月、花やかにさし出づるほどに、大御遊び始まりて、いと、今めかし。彈物、琵琶、和琴ばかり、笛ども、上手のかぎりして、折にあひたる調子、吹きたつるほど、風ふきあはせて、おもしろきに、月、高くさしあがり、よろづの耳澄める夜の、やゝ更くる程に、殿上人四五人ばかり、つれて参れり。(源氏物語、松風)

② 一方、山里のあそびには、こうした雅びやかなあそびの他に、山菜採りや川魚漁のような山里ならではの鄙びた風情をたのしむあそびもあり、例えば宇津保物語・国譲には、桂川で簀火を焚いて鶺鴒をしたり、綱を引いて川魚漁を楽しんだこと、山里でとれた川魚を調理して興じあったこと、山菜採りに出かけて紅葉の下で屋外炊飯をしたことなどが活々と描かれている²⁴⁾。なお山里でとれた山菜や川魚を贈りものとするのも興あることとされていたようであるが²⁵⁾、やはりここでも、その鄙びた風情がたのしまれたものと思われる。

③ 一方、あそびには楽・詩・酒と共に女性が不可欠な要素であったが²⁶⁾、山里のあそびにも女性との交情即ち恋が重要な主題としてあった。寂しい山里で思いもかけぬ佳人とめぐりあい、人目をはばかる恋におちる、というのが平安朝の物語においては最も好まれた主題であったが、山里はそうした恋の格好の舞台であった。山里の人目少ない場所柄とか、美しい自然、風流な住まいなどが恋の舞台として格好の条件を備えていたからであろう。ちなみに、山里がそのような風流な場所で風月を愛で恋を語らう場所というような観念があったからこそ、小野の山荘に隠れた浮舟のように、人目を避けて奥深に閉じこもることは「所の様に合はず、すさまじ」(手習)きこととされていたのである。

5. 山里の閑居

① 前稿でも述べたように、山里は基本的に寂寥の地であったが、その寂寥はまた「静けさ」でもあり、静けさの中で閑居することも山里の主要な興味とされていた。もっともこの種の愉しみは、専ら漢詩によって詠まれる

ことが多く、そこでは山里の地が郷塵を避く、人事少ない幽閑の地であることが類型のように詠まれている²⁷⁾。そして、その静けさの中で琴を弾き、詩を吟じ、酒盃を傾けるといった生活²⁸⁾、あるいは書を読み、無心に釣糸を垂れ、友あれば碁盤を囲うといった生活が²⁹⁾、俗世のあらゆる束縛から解放された自適の生活として礼讃されている。静けさの中での自由で拘泥りのない超俗的な気分が愛されたのである。

② 一方山里には、こうした愉しみと共に、粗末な住居、粗末な衣食に自足する生活、言わば「山居の侘び住まい」を愉しむ興味もあった。華やかな都市にあって栄利を求め、自己を見失うより、たとえ三間の茅屋、薛蘿の衣でも、一身を容れるに足ればよしとし、食もまた滋味を求めず、腹を満たせばよしとする³⁰⁾。というよりも、むしろ、そうした乏しく侘びしい生活の中にこそ、あらゆる欲望、あらゆる執着から自由になった束縛のない人間本来の生、心の安らぎがあるとする。それは池亭記を著した保胤を初めとして、当時の王朝貴族達が憧憬し続けた隠逸の境涯であり、華やかではあるが狭隘な都市にあって、煩瑣な儀式や位官への執着に明け暮れる王朝貴族達にとっては理想的な境涯であったろう。兼明親王はそうした境涯を身をもって実践した(せざるを得なかった)一人であるが、その「山亭起請」³¹⁾と「遠久良養生方」には、そうした生活の愉しみが具に述べられている。次に「遠久良養生方」の一節を日本古典文学大系本の訓読文によって引いておく。

・塙塞の上、亀山の傍。柴扉の門、竹編の牆。松に蓋有り、石に床有り。(中略)詩は両韻、琴は一張。其の苞めるは何ぞ、橘の霜に飽ける。彼の摘めるは何ぞ、葵の陽に向かへる。薇一簞、笋一筐。膾一筋、酒一觴。臥しては睡り、起きては彷徨ふ。荷露の氣、桂風の香。王湛よりも癡れ、嵇康よりも慵し。行楽に任せ、巫忘に入る。穢俗の地、無何の郷。心自得し、壽無疆なり。

都の生活に比べれば、何かにつけて不足がちな生活ではあるが、心のおもむくままの生活にこそ、むしろ最も高邁で自由な心の贅沢があるという。そして、黄金色に熟した橘の実、太陽の光を充分に受けた葵の実といった鄙びたささやかなものにこそ、淳朴・素朴な美しさ、輝かしい美があるという。つまり山里の侘びた生活にこそ、京では決して得ることのできない贅沢があり美があるというのである。このような侘びた生活に独自の愉しみを見出すという発想は、ニュアンスは多少異なるが、後の侘び茶の世界にも見られるところで、これについては後述する。

③ 山里の閑居のたのしみとしては「菜圃荒涼手自耕」³²⁾とか「灌園養一生」³³⁾「灌園自作送年媒」³⁴⁾のように、自ら耕し、自ら種く躬耕生活のたのしみもあった。手づから耕すことは古来隠者のしるしとされ³⁵⁾、また陶淵明のような隠逸詩人によって淳朴な田園生活の愉しみ

が詩的に詠まれて以来、隠者の自適の生活のパターンとされていたから、そうした隠逸風の生活が山里においても愉しまれたのである。

もっとも我国においては中国風の隠逸が育たなかったから³⁶⁾、文学作品の中で隠逸的生活やそこでの躬耕生活の愉しみが詠まれても、それは極く少数の（例えば兼明親王のような）例を除けば、あくまで山荘生活の中で擬似的・観念的に体験されたものでしかなかったであろう³⁷⁾。しかも王朝人にとって田舎はあくまで「むつかしき物」（源氏物語・蓬生）であったから、自ら農耕に携わることは卑しき業そのものだったはずである³⁸⁾。従って、先に山荘の建物が殊更田舎家風にされていたことを指摘したが、それもあくまで田舎暮らしを擬似的・観念的に体験するための演出だったのではないかと思われる。即ち、源氏が須磨では衣裳まで鄙びた風にしていたように、自身を鄙人にやつし、鄙人として振まうところに興味があったのであって、特にその中国風の躬耕の隠者を演ずるところに興味があったのではないか。実際、源氏の須磨での住まいは田舎家風であると同時に「石階松柱竹編牆」といった「いはむ方なく唐めき」たる住まいで（須磨）、中国風の隠者の住まいに相応しい造りにされていたし、また先の高階明順の山荘も、「唐絵にかきたる懸盤しても食はせ」などしているところを見ると（枕草子 99 段）、中国風のしつらいになっていたのではないかと想像されるが、明順が「手づから摘んだ蕨」をすすめているところなども、古来蕨を摘むのは首陽山に隠れた伯夷・叔斉の故事以来隠者の古典的行動パターンとされているから、自らをそうした隠者に擬しているわけで、ここでも隠者の生活が演じられていたのである。演ずることはそれだけで一つの遊びであるが³⁹⁾、山里ではそうした隠者、特に躬耕の隠者を演ずることが、場所柄に相応しい遊びとして愉しまれていたのである。

④ ところで中古の文学作品においては「閑寂な山里に独居する隠者や友を訪う」こともまた興味あることとされていた。それは例えば菅家文草「山家晩秋」に「千万人家一世間 適逢得意不言還（中略）若教天下知交意眞實逍遙濁比秋」という、山里に隠棲する友との静かな交意にこそ眞の逍遙（自適してたのしむこと）があったとする詩があるように、自らは朝市に在りながらも、山里に隠棲する友（隠者）を訪い、清談を交すことによって、一時の隠逸的気分に入り、自適の境地をたのしむことができたからである⁴⁰⁾。

また山里の友を訪うことは、そのこと自体も風流なこととされていた。須磨で流謫の生活を送る源氏を頭中将が尋ねていったように、失意の友の侘び住まいを思い、その孤独を見舞うという点が風流な行為（人やものの情・趣を解すること）とされていたのである。なかでも、雪に埋もれた山里で寒さと孤独に耐えながら独り侘び住

まいをする友を訪うということは、最も風流な行為とされ、例えば「昔男」の様々なみやび（風流）ぶりを描いた伊勢物語にも、業平が洛北小野に隠棲する惟喬親王を高き雪を踏み分けて見舞った話がのせられている（83 段）。政争によって時の政治勢力から失脚させられた友を訪うということは、自らの立場を危くすることにもなりかねないのであるが、それにもかかわらず敢て雪中訪友し、友の孤独を慰問するというのが、世俗の煩いに関わらない心澄む行為として賛嘆されているのである⁴¹⁾。なお、雪の降る日に消息を交わして見舞うことは、「すきがまし」きことともされていた。四条宮下野集に「雪の道も見えず降る日、草の庵ものこらず降り積めば、おろしこめたるに、馬に乗りたる侍、降りまどはされて来たり。すきがましようこそおぼえしか。とり入れてみれば…」とあるように、雪道の煩いにもかかわらず風流に徹するところが「すきがまし」とされているわけである。

結

以上、山里の興味として、山里の自然・田園風景・眺望等の魅力（1 章）、山荘の庭の幽趣・清澄さ・鄙びた風情（2 章）、簡素で粗末な田舎家風の山荘の風流な味わい・自然との近さ（3 章）、山里での様々なあそび（4 章）、隠逸めいた生活の愉しみ・風流（5 章）などを指摘したが、これらと前稿で明らかにした内容とを総合して見ると、王朝人にとって山里は極めて魅力的な場所であったことがわかる。実際、煩わしい俗世を逃れ、山里の美しい自然の中に閑居し、田園の風景に親しみ、友や恋人の訪れを待ち、久々の再開を喜ぶ、といった生活は、室内生活を専らとしながら閉鎖的な貴族社会にあって煩瑣な儀式と位官への執着に明け暮れる王朝人にとっては、憧れのまのような生活であったろう。そこには美しい自然に囲まれた生活や隠逸的生活・物語めいた恋という、王朝人が日頃憧憬する生活の全てがあった。その意味で山里は彼等にとっては言わば一つの理想境であったと言えるであろう。山里が平安時代以降、多くの歌に詠まれ、絵に描かれ、庭園の意匠とされたのも（作庭記）、そこに彼等の理想とする世界があったからであろう。

ところで「理想境としての山里」という観念は、中世においても（多少の変容は認められるが）基本的には継承されており、中世後期において茶人達が草庵風茶室に山里の風情を写そうとしたのも、やはり彼等にとって山里が依然として理想境であり続けていたからであろう。実際、草庵風茶室には、中古における山里の興味とされる多くのものが継承されており、そのことは草庵風茶室の興味とされるものの源流が、中古の山里にまで遡り得ることを示している。そこで以下では、本稿で挙げた山里の興味の中で草庵風茶室にも継承されていると思われるものを概観しておくことにする。なおその前に、本稿で挙げたような山里の興味の多くは、当時（中世後期）

草庵風茶室と共に茶の湯のための施設として造られた御茶屋にも継承されているので、その点から先ず指摘しておくことにする。

御茶屋とは、中世後期から近世にかけて、山里や都市の庭園内に造られた遊宴用の建物で、屋外の自然を愉しみながら茶の湯を中心とした様々なあそび、観月・花見・山菜摘み・詩歌管絃のあそび・酒・料理・眺望等々を愉しむための施設であるが、そこでの愉しみの殆どは平安時代以降山里において伝統的に愉しまれてきたものである。即ち、御茶屋は多くの場合、都市郊外の山里にあり、前方の開けた眺望のきく場所にあったが、それは中古の山里の山荘でも同様であったし（前稿2章）、身近に自然と接しながら（3章⑤）自然や田園のめづらしさや眺望の素晴らしさを愛で（1章①②③④⑤）、簡素で鄙びた田舎家風の建物で田園の風情を愉しみ（3章①②③④、2章②）、清澄・幽閑な松風や水の音を聞きながら（2章①③）山里の静けさや隠逸風の侘び住まいを愉しみ（5章①②③）、来客の訪れを待ち（5章④）、詩歌管絃や山菜摘みを愉しむ（4章①②）といった興趣は、そのまま御茶屋のそれであり、山里のそれでもあった。両者の違いは茶の湯が愉しまれたか否かという違いぐらいであろう。その意味で、御茶屋は言わば中古における山里の直系の子孫であったと言えるであろう。が一方、町衆を中心として形成された草庵風茶室においては、事情が少し異なり、貴族的な山里の興趣がそのまま継承されていたわけではない。即ち取捨選択が行われ、山里の概して閑寂・静的・隠逸的な側面のみが継承されていたように思われる。そこで以下ではそうした面を指摘しておくことにする。

先ず第一に、草庵風茶室においては「うき世をのかれ、みょうりをいとひ、閑事をたのしむ清者の業」（僊林）とか「正直に、慎しみ深く、おごらぬさまを侘と云ふ」（紹鷗侘びの文）とあるように、世外の閑寂境にあって虚栄を排し、贅沢を退け、あるがままの不足・不如意の中にこそ静穏・清浄な、物にとらわれない自適の境地があるとされ、そうした侘び住まいの境地が余裕をもって愉しまれたが、そうした愉しみは、5章の①②でも述べたように、既に中古の山里においても認められるところである。例えば具体的には、草庵風茶室においては鄙びた垣の内に簡素で粗末な田舎家風の山家をうつし、紙衣・鹿茶・淡飯といった粗末な衣食住が求められたが、こうしたものを評価する価値観も既に中古の山里に認められるし（2章②、3章①②③）、しかも草庵風茶室においてはよろず侘びたものが求められたが、当の茶人達があくまで都市の富裕な豪商達であったように、それはあくまで高度に洗練され演出された都市的趣味によるもので、紙子にしても田舎家風の座敷にしても、一種のやつしと考えられるが、こうした趣向も例えば須磨に侘び

住まいをした源氏によって既に実践されていたものである。また同様に、草庵風茶室においては「隠遁の心第一に侘びて」（紹鷗門弟への法度）と言われるように、俗世を去った閑寂境で侘び住まいをする隠者の心持ちでふるまうことが求められたが、これも茶人達が僧体で隠者の如くふるまってはいても、決して世捨人ではなかったように、あくまで観念的に隠者の境位を体験することが求められたわけで、そうした擬似的な隠者となることによって得られる隠遁の心も、既に5章③で述べたように、中古の山里で体験されていたものである。

また草庵風茶室においては「茶事もと閑居して、物外をたのしみ居る所へ、知人とぶらひ来て、茶点でもてなし、何かなと花を生て、なぐさみ候すがたにて候」（紹鷗侘びの文）とあるように、世外の閑寂境で侘び住まいをする友（隠者）を尋ね、友との清心の交わりを愉しむものであるが、それもまた5章④で述べたように、山里の風流として既に行われていたところである。しかも山里では雪中訪友の風流が殊に好まれたが、それも例えば降雪の際は「何時に限らず尋、茶をのむべし」（茶道便蒙抄）とあるように、茶道においても特別な趣向として受け継がれているものである。

また草庵風茶室においては「鹿相ナル座敷ニ名物置キタルカ好シ、風體猶以テ面白也」（山上宗二記）と言われるように、鹿相な環境の中に一際価値あるものを置いて見るという見方が特徴的に見られるが、そうした見方や美意識も、既に3章③で見たように、中古の山里において認められるところである。

また3章④で山里の山荘と自然の近さを指摘したが、これもまた極めて象徴化されてはいるが、草庵風茶室にも見られるものである。即ち、草庵風茶室は（特に欄口が出来てからは）極めて閉鎖的な空間を特徴とするが、その理念はあくまで「市中の山居」であり、山居の風情を愉しむものであるから、心は常に山中に向かっているわけで、四周の壁はあくまで市中の俗塵から茶室内部を隔離し、内部に在って山居を想う時に外部（市中）を山中に変換させるための仕掛けではなかったか、と思われる。つまり草庵風茶室は、物理的には都市の只中にありながらも、内部にあって山居を想う時には、松風の音も月の光も山中のそれとなり、心は最も真近に山中の自然を感じとっているのではないか。とすれば、草庵風茶室もまた実は極めて自然に近い造りにされていたと言えるであろう。

なおその他、草庵風茶室においては松や水（手水）も山居の風情を演出する重要な装置であったが⁴²⁾、それらもまた2章①③で指摘したように、山里の山里らしい風趣（清澄・幽閑な趣）を演出する装置として既に注目されていたところである。

さてこのように、中古における山里の興趣の多くは草

庵風茶室にもその主要な興趣として継承されているのであるが、しかし、それらは厳密にはそのままの内容で継承されていたわけではない。中世的変容を受けていた。例えば5章で指摘した山里の侘び住まいの興趣も、厳密には草庵風茶室におけるそれとはニュアンスが異なる。即ち、中古における貴族の山里の侘び住まいは、「山亭起請」や「遠久良養生方」にみられるように、その主たる思想的背景は老荘思想で、その生活には竹林の七賢的なやや放縦・懶惰な印象を与えるものがあるが、草庵風茶室において追求された侘び住まいには、楽・詩・酒といった歓楽的な要素がない分だけでも禁欲的で、しかも出家僧体の隠者の心でふるまうことが求められたように、宗教性・倫理性をおびた求道的・修道的な性格が強い。こうした違いはやはり、山里の侘び住まいといっても、中古の貴族達によって愉しまれた擬似的・隠逸風の侘び住まいの他に、一方では中古から中世にかけて流行した宗教的遁世者の侘び住まいの伝統があり、そうした伝統による影響・変容があったからである。即ち草庵風茶室の思想や興趣の源流には、中古における貴族の山荘と共に、中古から中世にかけての宗教的遁世者達の草庵が重要な位置を占めているわけで、次報では、この（主として中世の）草庵の観念について検討してみることにする。

注

- 1) 拙稿：中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について、日本建築学会計画系論文報告集第393号，pp.72～81，1988.11
- 2) 「めづらし」とは、岩波古語辞典によれば「見ることを連ねたい」というのが原義で、「①もっと見たい，逢いたい，聞きたい。②稀に見ること聞くことができて嬉しい，喜ばしい。③見馴れないので新鮮に感じられて心をひかれる。」の意とされている。一方小学館古語辞典によれば、「愛づ」から派生した語とされ、賛美・讃嘆すべきものの意が含まれているという。いづれにしても、見馴れないものの新鮮さに目を見張り、心魅かれ、讃嘆すべきものを「めづらし」と言い、必ずしも「稀少」「奇異」のみを意味しない。
- 3) おもしろしとは、「(それを見たり聞いたりして) 気持ちが晴れやかに楽しくなる」意で (小学館古語辞典)，気分を一新してくれるような感興をいう。
- 4) 例えば延喜二年の中宮温子御屏風には、「二月たがへす所，五月雨のうちに田植うる所，七月田守る庵ある所，十月あしかり摘みたる所」などの情景が描かれていた。また天暦六年の朱雀院御屏風にも、「田うつ所 (あさみどり野辺のあら田を打かへしけながき秋をまちや暮らさむ，元真)，田刈る所 (秋の野をたちいでて見ればあしびきの山の錦におとらざりけり，元真)，初めの冬，綱代の上に翁おり (わが宿にあるべきものをこの旅の綱代によりて日をもふるかな，元真)」というような田園風景が描かれていた。
- 5) 「賀茂へまゐる道に，田植うとて，女のあたらしき折敷の

やうなるものを笠に着て，いとおほう立ちて歌をうたふ，折れ伏すやうに，また，なにごとするとも見えでうしろざまにゆく，いかなるにかあらむ。をかしと見ゆるほどに……」

- 6) 「これは男どもの，いとあかき稲の本ぞ青きを持たりて刈る。なににかあらんして本を切るさまぞ，やすげに，せまほしげに見ゆるや。いかでさすらむ。穂をうち敷きて並みをもをかし。庵のさまなど。」
 - 7) JAY APPLETON: The Experience of Landscape, JOHN WILEY & SONS 1975
 - 8) 例えば東三条藤原兼家の賀の四尺屏風六帖には地方の名所18景が描かれ，その各景を旅人がつないでゆくという構成になっていたが，例えばその丁・戊帖には次のような場面が描かれていた。丁帖：「打出の浜，片山に鹿つらねたり，行く人あり」・「鏡山こゆる人あり，水清く流れたり」・「しかすがの渡り舟さすところあり，馬にのりて人々行く，うへの野に鹿多く連ねたり」，「戊帖：「こゆるぎの磯，鶴多く遊ぶ，よなれたる松あり，又小松多く浜に生ひたり」・「武蔵野霧立ちたり，幕ひきて旅人多く見ゆ」・「ふたらの山社ある，苦辺に旅人多く行く，月出たり。」
- 一方，このような野山を旅人が行く描写は物語にも見え，例えば源氏物語にも「端のかたに立ち出でゝみれば，はるかなる軒端より狩衣姿色々に立ちまじりて見ゆ」(手習)とか「例の，はるかに見やらのゝ谷の軒端より，さき心ことに追ひて，いと多うともしたる火の，のどかならぬ光を見る」(夢の浮橋)のような倭絵屏風の情景描写が見える。
- 9) ・はるけき野辺を分け入り給ふより，いと，物あはれなり。秋の花，みな衰へつゝ，浅茅が原も，かれがれなる虫の音に，松風すごく吹きあわせて，そのことゝも聞きわかれぬ程に，ものゝ音ども，たえだえ聞えたる，いと艶なり。(源氏物語，賢木)
 - 10) 「艶」の解釈は現在のところ極めて多岐多様にわたっているが，少なくとも自然現象に対して「艶なり」と言われる場合には，「もの寂しげな風情の中に幽かに美的な要素が含まれている場合に感じとられる心をそそるような情趣」を意味しているように思われる。「艶」に対する諸家の解釈については次の文献に詳しい。梅野きみ子「えんとその周辺—平安文学の美的語彙の研究」笠間書院，昭和54年。
 - 11) なお，京の庭でも柴垣や卯の花垣にされることはあった(例えば源氏物語の六条院の北の東の庭や紀守の中河の邸の庭など)。しかし，それもあくまで，山里風の庭園の意匠として配されたものである。
 - 12) ・山里はしづのくゑ垣下茂み浅茅まじりに堇花咲く(出観集，覚性法親王)
・山里はそしろの門田かりほして垣根のあけびひとりゑみせり(同上，同上)
 - 13) ちなみに「うるはし」とは，形の整美された端麗な美を意味し，「故ある」とは，しかるべき由緒，格式を感じさせる奥ゆかしい端正な美をいう。犬塚 旦「王朝美的語詞の研究」笠間書院，昭和48年
 - 14) 例えば潁川の水で耳を洗ったという許由の故事などによる。
 - 15) ・かう世離れたる所は，水の音も，もてはやして，物の

- 音すみまさる心地して（源氏物語、椎本、夕霧の山荘）
- 16) ・法華三昧行ふ堂の、懺法の聲、山おろしにつきて聞えくる、いと、尊く、瀧の音に響きあひたり（源氏物語、若紫、北山の山荘）
 - 17) また宇治八宮の山荘も、草葺きの「隠ろへ給ふべき物の隅だになき」（総角）はかなき御すまひではあったが、それでも「よしある」とされていた。（橘姫）
 - 18) 本朝文粹「山亭起請」前中書王
 - 19) 本朝文粹「山家秋歌」紀納言
 - 20) 本朝無題詩「夏」法性寺入道殿
 - 21) 世人好起豊屋峻宇 殆至山節藻 悦其費旦巨千萬 基住纔二三年 古人云 造者不居 誠哉斯言
 - 22) 例えば「月、隅なう澄みわたりて、霧にも紛れず、さし入りたり。あさはかなる廂の軒は、程もなき心ちすれば、月の顔に向ひたるやうなる、あやしう、はしたなくて、紛らはし給へるもてなしなど、いはむ方なくなまめき給へり。」（源氏物語、夕霧）、「有明の月も出にければ、格子の隙どもより、ところどころ漏り入りたるが、いと心づくしなるに、思し侘びて、格子のもとのかき金を放ちて、押しやり給へれば、残りなうさし入りたるを、女君、いとゞ侘しうて、引き被き給へるを、とかく、ひきあらはしつゝ、見たてまつり給に……」（狭衣物語）
 - 23) ・風のさと吹きたるに、木々の木末ほろほろと散り乱れて、御琴に降りかゝりたるやうに散りおほひたる（夜の寝覚物語、巻5、広沢の山荘での描写）
 - 24) 例えば国譲・下には水尾の紅葉の下で山菜を摘み、屋外炊飯しながら興じあったことが次のように描かれている。「紅葉の林に御座敷きて皆る給ひぬ。（中略）山の法師ばら、童部出してをかしき枯木拾はせて、御前に銀の碗などとりいでて、お物炊がせ、お前の朽木に生ひたる茸ども薬物にさせ、苦竹など調じて、銀の金碗に入れつゝ参れば、君達興じつゝめしそへつゝ参れり……。」
 - 25) ・御寺のかたはら近き林に、ぬきいでたる筍、そのわたりの山に掘れるところなどの、山里につけては、あはれなれば、たてまつれ給ふとて……（源氏物語、横笛）
・鮎一籠、鮠一籠、石斑魚、小鮒入れさせ、荒巻など添へさせて、藤壺の若宮の御許に、手づから、往来月日書きて、せむ立てゝ、御名し給へり。かたはらに「君がため静けき空にすむ魚を今日より見せむ千代の日ごと」と書きて、すはうせむにして赤き色紙に書きて、瞿麥の花につけたり。（宇津保物語、国譲中）
 - 26) 小西甚一：風流と「みやび」—琴・詩・酒・妓の世界—、国文学（解釈と教材の研究）、昭和57年10月。
 - 27) 例えば「嵯峨之院埃塵外 乍到幽情興偏催」（文華秀麗集、春日侍嵯峨山院、淳和天皇）、「茅屋幽閑無客至愛知此地僻郷塵」（本朝無題詩、余春洛外別業即事、法性寺入道殿下）、「此地幽閑人事少」（凌雲集、秋日於友人山荘、桑原公腹）、「茲地清閑人事稀」（文華秀麗集、嵯峨院納涼、巨識人）など。
 - 28) 「僻遠境閑人事少 非携詩酒又何求」（本朝無題詩、夏日桂別業即事、藤原茂明）、「世務餘閑排草堂 鳴琴置榻酒盈觴」（同上、藤原敦光）、「山家秋暮意如何 觸物感懷逐多處處賦詩閑飄詠 時時秋醉獨狂歌」（同上、秋日山居即事、三宮）
 - 29) ・書を読む興趣を詠んだものとしては、管家文章「灘聲」に河西の山荘を尋ねた時の「此夕無他業莊周第一篇」と

いう詠がある。閑寂のきわみのようなこの山荘のこの夕べには、莊士の逍遙篇を読んで、心を自在に広げ、解放することが最もふさわしい業であるという。

・魚竿を把る興趣を詠んだものとしては、本朝文粹「山家秋歌」（紀納言）に「忘老至 計身安 乘閑空把一魚竿」とあり、その生の優にして閑たる自適の境地であることが述べられている。

・管家文章「山家晚秋」に「數局圍碁召坐隠 三分淺酌飲忘憂」とあり、囲碁は居ながらにして心を隠者の世界に遊ばせるものとされていた。

- 30) ・ト居山水息心機 不屑人間較是非 局潤戸 掩松扉秋寒只納薛蘿衣（本朝文粹、山家秋歌、紀納言）

・結菴居三徑 灌園養一生 糟糠寧滿腹 泉石但歡情水裏松低影 風前竹動聲 聊輸太平祝 獨守小山亭（凌雲集、田家、小野永見）

- 31) 日本古典文学大系本により、その訓読文の一節を次に引く。

・東は棲霞觀、西は雄藏山、中に茅茨、松柱三間有り。（中略）食は飽くことに取て、滋味を求むること勿れ。酒は憂を忘るること取て、痛く酔ふことを要めざれ。且く乃が懷を述べ、各爾が志を言へ。秋の燈は夜の深くまで話すことを許し、春の枕は日の高くなるで睡るに任す。或は坐、或は行き、黒きを衝き、明きに徹る。寒きときには竈下に炊ぎ、暖かきときには南榮に暴す。山雲厭はず、澗水情無し。優なる哉、遊なる矣。聊かに吾が残生を送らむ。

- 32) 本朝文粹「山家秋歌」紀納言

- 33) 凌雲集「田家」小野永見

- 34) 本朝無題詩「山家春意」藤原周光

- 35) 例えば論語にみえる長沮・桀溺、荷蓑杖人などの例。

- 36) 小林 昇「中国・日本における歴史観と隠逸思想」早稲田大学出版部、昭和58年。

- 37) ただ、平安中期の文人慶滋保胤の場合は、隠逸（市中隠）への憧れから、京の邸内に畑をつくり、下僕と耕作するという躬耕生活の愉しみを池亭記で述べている。しかしそれも、俗人としての生活（役人生活）の中で愉しまれたわけだから、やはり観念的に愉しまれたにすぎないと言えるであろう。

- 38) 例えば伊勢物語58段に、趣味人で風流を解する色好みの男が、手づから自分の田の稲刈をしようとしたのを、隣家の女房達が見て「いみじのすきもののしわざや」といって冷やかす話が出てくるが、おそらくこの趣味人にとっては、手づから稲刈をすることは、躬耕の士にならう中国風の風流を実践することだったのであろうが、それを現実に実践することは風流を通り越しているわけで、それ故それを女房達は冷やかしたのである。

- 39) R. カイヨア：遊びと人間、清水幾太郎他訳、岩波書店、昭和45年。

- 40) 例えば次の詩も同様な内容を詠んだものである。「訪鄭處士山居 暮高趁到碧峯頭 便謁清顔述事由 心地早銷方寸火 鬢霜鎖數莖秋 馬迷紅葉口難去 人礙青蘿更留身 隱深山名不隱 相尋所以暫同遊（江相公、扶桑集）」

- 41) ちなみに今昔物語（巻24、36話）では、こうした業平の行為を「世ヲ背テ心ヲ澄シテ、此様ニ行テ…」と述べている。

なお雪中訪友のモチーフは、源氏物語をはじめとする

女流文学においては、専ら男主人公が山里でながめたる生活を送る女主人公を尋ねるという型になっている。

- 山深く入るまゝに、やゝ、降り積みたり。常よりも、わりなき、稀の細道を、わけ給ふ程、御供の人も、泣きぬばかり、恐ろしう、煩はしきことをさへ思ふ。(源氏物語、浮舟、匂宮が宇治の浮舟を尋ねる場面)
- あはれ、山里に、いかに思ふこと繁うながめたまふらむと、おぼしやりて、(中略)山里へおはす。「我、かばかり雪を分けて尋ね入りたらむを、対の君、少将など、いかばかり岩木をつくりてか、情をかけざらむ」と…
…(夜の寝覚、巻2)

42) 草庵風茶室において松がとりわけ愛好されたことは、紹鷗の茶室が、坪の内は草も木もない禁欲的な庭にされていたにもかかわらず、「見越ニ松大小多シ」とか「ウシロニ松ノ林在リ、ヒロシ、松風計聞」(山上宗二記)とあるように、好んで松や松風の趣の中に配置されていたことから推察されるであろう。また手水についても、「手水の事、専ら心頭を滌ぐを以て此道の肝要とす」(南方録)とあるように、俗塵を清め、「一身清浄の無一物の底」(同)となすものとして、茶庭には不可欠の要素とされていたものである。

SYNOPSIS

UDC : 72.01 : 721 : 398

ON THE CHARMS OF “YAMASATO” DESCRIBED IN HEIAN PERIOD LITERATURE

—Study on the ideas of “Sankyo” through the Japanese Literature. Part 2—

by **KYOHEI ONO**, Associate Prof. of Hokkai Gakuen University, Member of A. I. J.

The purpose of this paper is to clarify the charms of “Yamasato” described in Heian Period Literature.
Contents are as follows;

Preface

1. Nature, country and prospect of Yamasato
2. Garden of villa in Yamasato
3. Architecture and furniture of villa in Yamasato
4. Pleasure of Yamasato
5. Calm life of Yamasato

Conclusion